人文学部プロジェクト活動報告

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています。（右は代表者。）

山口国文	林　伸一	平野　芳信
英語と英米文学	太田　聡	
山口大学独仏文学	井上三朗	
山口地域社会研究	横田尚俊	
アジアの歴史と文化	阿部泰記	
〈教え、学び、分かること〉の基礎的探求	ジュマリ・アラム	
やまぐち学推進プロジェクト	田中誠二	

各プロジェクトの、今年度の活動報告を掲載いたします。

山口大学人文学部国語国文学会

山口大学人文学部国語国文学会

今年度も、例年通り、研究プロジェクト助成にかかる人文学部戦略的経費の配分を受けつつ、山口大学人文学部国語国文学会員納入の学会費に基づき、下記の事業を推進した。

第 36 回山口大学人文学部国語国文学会研究発表会・総会

2011 年５月８日（日）　9:30―16:30

日本語学分野では陳頴卓「「手」に関する比喩表現について―日本語と中国語における表現の比較―」ほか６名による研究発表、日本文学分野では内海友華『世間胸算用』の主題―巻二、巻三を中心に―」の研究発表があり、それぞれ活溌な質疑応答が行われた。参加者は総勢 50 名で、その内訳は、人文学部在学生 35 名・学内教員７名・人文学部卒業生６名・一般２名であった。

第 26 回山口大学人文学部国語国文学会研究懇話会

2010 年 12 月３日（土）　14:00―16:00

昭和 52 年年度に人文学の前身である文理学部を卒業し、現在、山口県立下関南高等学校に国語科教諭として勤務している藤澤敏行氏を招いて、「源氏物語入門　桐壺更衣　六条の御息所　明石君を中心に」と題して講演会を開催した。源氏物語を案内の手がかりとして、京都の魅力を余すことなく語り尽くす藤澤氏の語り口に、聴衆一同聞き惚れる濃密な時間が流れた。参加者は総勢 27 名で、その内訳は、人文学部在学生 19 名・人文学部教員４名・人文学部卒業生４名であった。

『山口国文』第 35 号の編集・刊行

上掲研究発表会での口頭発表を基礎とした論文８本・前年度研究懇話会に基づくエッセイ１本・新刊書書評３本を掲載し、３月 31 日の発刊を目指している。

内海友華　『世間胸算用』の主題−巻二、巻三を中心に−

小野美典　〔資料紹介・翻刻〕（山口県立山口図書館蔵）木村豊平『蒲園文草』
小原寿美・岩田一成　EPAにより来日した外国人看護師候補者に対する日本語支援−国家試験対策の現状と課題−
黄　　潔　話すことに関する構成的グループ・エンカウンターの実践−日本人中心の授業と留学生中心の授業との比較研究−
林　伸一　外国人留学生のための特別支援プログラムについて−現状と今後の課題−
木村直美　日本語教師養成講座の成果と問題点−日本語教育能力検定試験合格者の事例研究を中心に
陳　穎卓　「手」に関する比喩表現について−日本語と中国語における表現の比較−
郭　潔・林　伸一　格助詞「に」と「へ」の使い分けについて−アンケート調査の分析を基に−
佐々木翔太郎　「鬼」と「姫」の接頭語用法について−アンケート調査の分析と検討−
小川久美　トークルーム　図書館への誘い
二階堂整　（書評）添田建治郎著『２番教室からの日本語講座—方言・地名・語源のなぞ』
田口律男　（書評）水本精一郎著『島崎藤村研究—詩の世界』『島崎藤村研究—小説の世界』
石原千秋　（書評）平野芳信著『日本の作家１００人　村上春樹　人と文学』

（平野　芳信）

『英語と英米文学』

本誌は、学内同人による紀要として 1965 年に創刊されたものである。年１回の発行を続けて、今年度で第 46 号を迎えた。本誌創刊時の会員は山口大学文理学部英米文学科教官であった。その後、（文理学部の改組・教養部の設置に伴って）第 2 号の会員は文理学部英米文学科教官および教養部英語科教官となり、さらに第 5 号からは教育学部英語科教官も会員に加わって、会員数、内容ともに充実したものとなっていった。現在は、人文学部英語学・英米文学コース所属の教員を中心に、教育学部、経済学部、留学生センター所属の英語関係教員が会員となり、英語学、英米文学、英語教育、英語圏文化・その他に関する論文、研究ノートなどを投稿して、研究成果の発表を行っている。発行後は、もちろん全国の大学図書館等へも送付している。

山口大学の英語関係教員（英語分科会メンバー）は、日ごろから、共通教育の英語の授業担当に関して緊密な連携ができているが、本誌の発行ということにおいても、学部を越えた協力体制が十分にできあがっている。そして、会員の中から定年退職者が出る年度には、本誌は「退職記念号」として刊行され、同会員らによる送別会の席でその記念号の贈呈が行われてきた。

なお、人文学部から支給された研究プロジェクト助成金は、本誌の印刷・製本費用の一部に充てられる。

（太田　聡）

『独仏文学』

独仏文学研究会は、ドイツやフランスの文化圏の言語文化分野で言語学や文学を研究する教員から構成される研究会である。元教員も準会員として研究会に所属している。毎年フランス文学・言語とドイツ文学・言語における研究論文を発表している。

2011 年度の第 33 号に掲載された論文は以下のとおりである。

『ファウスト』脚注の試み（２６）

渡辺信生

サドにおける悪の世界

井上三朗

福永武彦とジュリアン・グリーンにおける死の主題（一）　井上三朗

今年度の編集委員は、エムデ・フランツ（編集長）、井上 三朗、坂本貴志が務めた。

（エムデ・フランツ）

山口地域社会研究

「山口地域社会研究」プロジェクトは、山口地域社会学会の研究活動より成り立っている。

2011 年には、３月、７月、11 月と、３回の研究例会を開催した。政治的関心の国際比較や不登校への対応、離島社会の現状、自治体における協働のまちづくりなどに関する計９本の研究報告が行われ、その内容をめぐって、報告者とフロアとの間で、活発な質疑応答・討論が展開された。

また、今年度も学術雑誌『やまぐち地域社会研究』（第９号）を刊行する予定であり、現在、編集作業を進めているところである。

（横田尚俊）

『アジアの歴史と文化』16 輯

本本年度も山口大学人文学部にゆかりのある研究者によって珠玉の学術成果を投稿していただいた。以下にその論文 13 篇の概要を記して本号の紹介としたい。

1.馬彪（山口大学教授）「龍崗秦簡における律名の復元について」

『晋書』刑法志や『唐律疏義』など古典文献や漢律研究の集大成といわれる沈家本『漢律摭遺』や程樹徳『九朝律考』などを参照し、睡虎地秦律や張家山漢律などの出土文字と比較して龍崗秦簡における律令名を復元し、従来の「５種」「３種」説という律名の復元案と異なり、１「盗律」、２「賊律」、３「囚律」、４「捕律」、５「雑律」、６「具律」、７「徭律」と「傳令」「闌令」、８「厩律」、９「金布律」、１０「田律」（田租税律」「田令」）という「１０種」説を提出したものである。

2. 富平美波（山口大学教授）「方中履『切字釈疑』「啌噎上去入」の条を読む（「切字釈疑」第 6 節訳注）

「方中履『切字釈疑』「等母配位」「切韻当主音和」「門法之非」「字母増減」「真庚能備各母異状」に続き、「啌噎上去入」の部分について、本文の校合と訳注の作成を行い、内容について若干の考察を加えた。

3.周麗玲（湖北大学副教授）「關於中國非物質文化遺産傳承人保護的斷想」

為了保護這一份遺産，各國政府都出臺政策和措施，對非物質文化遺産加以保護，其中，重要措施之一，是保護非物質文化遺産的傳承人。但是，在非遺傳承人保護制度推行數年後，筆者認為有必要對這一制度的實行情況，加以反思和檢討，以推動它更趨完善。

4. 桂勝（武漢大学教授）・張友雲（湖北省群衆芸術館館員）「荊楚民風民俗與社會變遷」

民俗文化傳承“從重視傳統轉向關注現代，關注現代化給民俗文化帶來的巨大變化”。滄海桑田，物是人非，工業化、城市化、現代化的浪潮此起彼伏，一浪高過一浪衝擊民俗、民間觀念。民俗是流動的，世情漸變，習俗移志，安久移質，傳承與播布是民俗存在的永恆。

5.　肖春豔（湖北経済学院教授）「東江文化的源流探析」

東江文化是中國廣東省的壹個地域文化，探析其源頭與流變，對于當地加強東江文化建設，促進當地經濟社會發展與繁榮具有十分重要的現實意義與使用價值。筆者從地緣、人緣、傳承三個

維度對此進行了探討。

6. 胡翼鵬（武漢大学）「中國隱士的社會型塑機制論略」

社會輿論的認可與認同是隱士身份建構的公共基礎，隱士的個性行動需要社會輿論的認同才能形成廣泛流播的名譽，因而征辟制度是隱士身份建構的認證環節，征辟既是隱士與官僚的分水嶺，也是隱士純粹性的試金石。

7. 孟修祥（長江大学教授）「漢代楚歌類型辨析」

人們有意無意之間忽視了對漢代楚歌的整體觀照，以致於對漢代楚歌的系統研究至今仍然付之闕如。本文只就漢代楚歌作一個大致的分類辨析，以為其系統研究走出第一步。（一、祭祀儀典中的楚歌，二、頌世與諷世的楚歌，三、抒寫悲怨之情的楚歌）

8. 梁惠敏（長江大学副教授）「貌 “清”、品“清”、詩“清”—論孟浩然」

孟浩然追求明淨、雅潔、澄清、透亮人生之境與詩歌之境。自王士源、李白、杜甫等開其端，後來對孟浩然表示崇拜和敬仰之情者甚多。他們以一“清”字對孟浩然及其作品的整體評價頗為中肯。

9. 韓鶴（長江大学講師）・孟修祥「從慶曆新政和熙寧變法論韓琦的“保守”」

韓琦在北宋慶歷年間參與並支持范仲淹主持的慶曆新政。後因反對熙寧變法，在歷史上被歸為保守派。本文從兩次變法的異同點出發，分析其在此期間態度的前後轉變，並得出韓琦是非簡單的循舊尊古的保守派之結論。

10. 程永超（山東大学副教授）「羅森の目に映った鎖国と開国の日本」

近代中日文化交流の先駆者である羅森の人物像を紹介し、次に彼の書いた『日本日記』を通して羅森の目に映った日本像、主に羅森の目に映った「鎖国」の日本と「開国」の日本を分析し、そして中国人の羅森に不思議と思うものをいくつか拾って紹介した。

11. 邢永鳳（山東大学教授）「《大日本史》中的中国要素」

日本明治維新，日本近代化的進程，都可見«大日本史»中的“尊王思想”的影子，更為重要的是，近代日本与中国的関係，近代日本対中国的認識，也都与«大日本史»有着很深的淵源。可以説，«大日本史»中的中国要素，是這部史書的重要特点。

12. 王秋陽（山口大学東アジア研究科）「台湾総督府国語学校の設立と言語教育の推進」

台湾総督府国語学校の設立とともに展開された教員養成と、国語伝習所の教員として赴任した教育者が直面した言語教育の環境、そして言語教育の問題点を解決するための教授方法についての研究を、教育者が行った教育活動に焦点を当てて明らかにした。

13. 阿部泰記（山口大学教授）「湖北の宣講書『勧善録』残巻について」

『勧善録』は完本ではなく、上海図書館蔵本（巻 1）の他に、孔夫子旧書網広告本（巻 1、巻 3）、及び個人所蔵の複写本（巻 4）がある。本書は湖北で編集され刊行された宣講書であり、本論では各巻を照合して全体の概要を確認し、その特徴を分析した。

（阿部　泰記）

〈教え、学び、分かること〉の基礎的探究

（山口大学哲学研究会）

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学、思想系の教員を中心とした組織で、会誌の発行、合評会、研究発表会などの活動を行っています。現在正会員(学内の常勤教員である会員)は 12 名ですが、そのうち、人文学部の教員は、脇篠靖弘、周藤多紀、柏木寧子、栗原剛、ジュマリ・アラム、田中均、藤川哲の 7 名です。また、名誉会員(過去に山口大学に所属していたことのある学外の会員)17 名のうち、元人文学部

の教員は、上野修、遠藤徹、古荘真敬、奥津聖、加藤和哉、木村武史、武宮諦、外出紀久子、林文孝、頼住光子、豊澤一の 11 名です。会誌『山口大学哲学研究』第 18 巻が 2011 年 3 月に発行されましたが、掲載論文は以下の 3 本です。

●村上林造「共通教育科目での対話の試み―学生とともに漱石『坊つちゃん』を読む」
●木村武史「サステイナビリティ問題の時間論: 混在する過去。現在・未来」
●ジュマリ・アラム「宗教とは何か―認知宗教学的な視点からの探究」

山口大学人文学部の予算より支給された「平成二十二年度研究経費に係る戦略的経費(研究プロジェクト助成)」が、会誌印刷、製本の費用の一部に充てられました。また研究会発表会としては、2012 年 2 月 23 日に、時間学研究所主催「時間学基礎セミナー」との共同開催というかたちで行われました。なお本年度の運営委員は、藤川哲と佐野之人（教育学部）の二名が担当しました。

(ジュマリ・アラム)

やまぐち学推進プロジェクト

やまぐち学推進プロジェクトは、学長認定の山口大学研究推進体の１つである。第Ⅱフェーズの研究推進体１９の内、数少ない文系プロジェクトである。人文学部の９名を中心に、教育学部２名、経済学部１名、埋文資料館２名、計１４名のメンバーからなる。理念・目的は、山口地域の歴史的・文化的な固有性と普遍性を解明し、学内外に発信しようというところにある。

平成２３年３月には、『やまぐち学の構築』第７号を刊行し、以下の７編を掲載した。

幕末期萩藩財政史研究序説
田中誠二

萩藩後期の山代紙
田中誠二

平郡島における舸子役と漁業権
木部和昭

林勇蔵家の歴代履歴と累積文書について
中野美智子

明暦二年萩藩江戸上屋敷普請関係史料
森下　徹

近世氷上山境内の広域差図とその細部構成
真木隆行

山口県内における山陰系刻目突帯紋土器
中村友博

平成２４年３月には、『やまぐち学の構築』第８号を刊行の予定である。

また、平成２３年１２月１７日（土）に、第３回やまぐち学シンポジウムを、「大内氏と文化振興」というテーマで開催した。今回は大内氏歴史文化研究会との合同シンポジウムとし、山口市教育委員会とわがプロジェクトの主催とした。もちろん人文学部にも、共催をお願いした。シンポジウムの基調報告は、人文学部の真木隆行准教授「大内盛見の寺社興隆策」と、人文学部の尾崎千佳准教授「新撰菟玖波集と長門住吉社法楽百首和歌」の２本であり、内容の充実した報告であった。つづいて山口県立大学准教授伊藤幸司氏の司会で、「大内氏と文化交流」のディスカッションが行われた。真木氏・尾崎氏・伊藤氏のほかに、山口県立美術館学芸員荏開津通彦氏、山口市教育委員会文化財保護課佐藤力氏、以上５人のパネリストの発言を交えて、活発な討論が行われた。日本中世史、国文学（俳諧・連歌）、美術史、考古学という多彩な専門家が集ったおかげで、豊かな内容のシンポジウムとなり、１２０名を超える参加者を得て盛会であった。

（田中　誠二）